

# 神楽伝説

# 上沼田神楽

昭和五十六年著

上沼田神楽の由来 ……1

奏楽 ……3

舞 ……4

演目 ……7

# 1. 上沼田神楽の由来

上沼田神楽の起源は享保2年(1717年)以前と伝えられるが、その由来については定かではない。

沼田地区は、東に本郷村、西に錦町高根地区を境にもち、山の中に滑り出たような集落である。古くは戸数も百軒以上を数えたと言われる。それは百軒目の屋号を百尻と呼んでいる事からも推察される。

古来、平家の落人が隠れ住んだとされ、その伝説は様々に語り継がれている。耕地も棚田式が多く、水が至って少ないため耕作に大変不自由をしたと言われる。地区の北側を女峠谷、南に田ノ迫谷が流れているが、その両谷とも水量が少ないため畑作を主とし、一方で陸稲やソバ、アワ、キビ等も栽培したもの、当時の生活は至って困難であった。



上沼田神楽を支える神沼田神社

厳しい生活の中、信仰の想いと共に神楽が舞われるようになった。神社の数も多賀神社・白鳥神社・柿ノ本人麻呂神社・杵崎神社と四社を有していた（現在は一社に統合）。

古人の伝承によると上沼田神楽は現在の形のものに合わせて三回変わったと言われる。最初は信仰を主とした神楽で、その目的は幸せを求め災いを防ぐことであり、「ねぎごと」に対し「のりごと」があった。そして文化の高揚と共に神楽の形も変わり、神明原部落の若者も交え、その神楽の形は更に変わっていったと言う。しかし、年月が経つに連れて神明原部落の若者も少なくなり、上沼田部落の若者達が独立してこの神楽を継承した。

ここで再び神楽の大改革が起きた。それは元来の信仰的神楽から観賞的な神楽が要求される時代へと変化したからである。ちょうどその頃、広島県安芸郡白砂という所から石工職人が当地を訪れ、この職人が神楽を知っていたことから、師匠として新しい形の神楽を学んだとされる。

さて、ここで申し述べなければならないのは、上沼田部落は、女峠と田ノ迫の二つの講に分れている。その講が心を合わすにもこの神楽の改革は役立ったものと思われる。それは神楽囃子の中に「タノサコ、メットウ、タノサコ、メットウ、タノサコメットウ、トン」と云う渡り拍子がある。二つの講の若者が一つに集い、貧しく苦しい生活を送りながらも「田ノ迫・女峠」と渡り拍子を踏み、テンポの早い六調子と合せて、毎夜きびしい練習に励んで来たのである。そこでこの神楽は一般大衆の支持を得て、部落民に働く喜びを与え、地域の空気を明るくし、秋ともなれば地区の神社は勿論、他方の神社にも神楽の奉納に出掛け、住民の慰安につとめた。

神楽を分類すると、伊勢系・巫女系・出雲系・獅子系に分けられる。今の上沼田神楽

は出雲系であり、出雲系は神能式のもので名称を神代神楽とも呼ぶ。神楽の行われる場所については、古くは民家を当屋と定めてその年の神楽の終わりに翌年の当屋を決めていたという。現代ではこの風習は全くなり、すべて神社で行われている。

また、この頃、松本という神官が上沼田神楽の縁起を一般の人々に解りやすくする為に改めている。

時代の流れは、人の心も変えていく。第二次世界大戦の勃発と共に若者はすべて戦場に赴き、部落に神楽の舞人はいなくなった。そんな中でも、僅か12才の子供や60才以上の高齢者によって神楽が続けられた。それは、第二次大戦に何が何でも打ち勝とうという信仰の心と、農村に他の娯楽がなかったからと思われる。

願いも空しく日本は敗戦を迎えた。そして戦後の高度成長と共に各家庭にテレビが普及し、こうした古い郷土芸能は見捨てられ、加えて激しい農村の過疎化は進み、上沼田神楽も神楽を伝承していく若者がいなくなり、一時は中絶し、解散寸前のところまで来ていた。しかし、戦後30年目にしてUターン青年や周辺の若者達が、このすばらしい無形文化財の滅亡を憂い上沼田神楽の保護に乗り出し、伝承につとめている。

今や時代は低成長期に変わり、各地でこうした神楽が甦りつつある。やはり郷土に根強く浸透し、里人の心の一角に生きている無形文化神楽はいつまでもいつまでも郷土に愛着をそそる何ものでもなかろう。

## 2. 上沼田神楽の奏楽

### 神楽囃子（奏楽）

上沼田神楽の奏楽は、笛・大太鼓・締太鼓・調子鐘の四楽器により囃される（かつては締太鼓を除く三楽器であった）。

六調子を軸として、太夫系の「渡り拍子」、舞人の微妙な足の運びが要求される「唐調子」などがある。一定の調子を延々と繰り返すため単調になり易いが、それ故に楽士の安定感、舞人との呼吸が要求される。

(1) 六調子 演目：全て

「ヌカモチャ ドガドガ ヌカモチャ ドガドン」

これは、貧しかった当時の食生活をそのまま楽器の音にして伝承されたものである。不味いヌカモチを食べながら神楽を練習していたのである。

(2) 唐調子① 演目：黄泉醜女（姫登場）

「カッコ カッコ カッコ カッコ カッコ カッコトーン カカカ トーン」

(3) 唐調子② 演目：事代主の神（事代主登場）

「トンカッカッカ トンカッカッカ トンカッカッカ トンカッカッカ トン」

(4) 渡調子 演目：火の神、黄泉醜女、八俣大蛇など（太夫登場）

「タノサコメットウ タノサコメットウ タノサコメットウトン」

前章で述べたように、田ノ迫と女峠の二つに分かれている上沼田地区を一つに結ぶ思いからこの調子ができている。

(5) ソバ調子 演目：八俣大蛇（桶運び）

「トントコ トロシコ トントコ トン トロシコトントコ トントコトン」

この調子は、百姓がソバを主食代わりに食べていた頃、ソバを盛んに増産し、粉にして手打ちソバとし、またソバカキ等をして野良仕事をしている調子をとっている。

(6) ひょっこ調子 演目：八俣大蛇（爺婆登場）

「トロンコ トントン スッテントン トントコトントン スッテントン」

(7) 清め楽 演目：天神地祇（登場）、神事

「トントコトコトコ（×8） トントコ トントコ トントコ トントコ トントンスットンスットントントン スットスットン スットントントン」

## 3. 上沼田神楽の舞方

### (1) 楽舞の舞い方

舞曲の構造は、まず神前に列座し拝礼をした上で立ち上がる舞と、楽屋から舞出す舞の二通りに分けられる。

上沼田神楽は楽屋から舞出すもので、まず中央に、次に四方割りとなる。中央というのは四方割（四ツ角を切る）に移る前と四方割りの終わった時に中央に合わせる輪舞である。四方割りは、どの舞でもその基本となる部分で、向き合ったまま交互に入り交じりつつ神前に向かって切り、次に四方に向かって交互に入り交じる。これで四方を割った事になる。

二人舞の時はこれを二方四方といい、三人舞の時は三方六方、四人舞の時は四方八方という。これを八方割りという。また、二人ずつ背中を合わせて舞う事を「するが舞」といい、足の踏み方にも三ツ足・四ツ足・打込み足・座ずり足・折敷足等あり、その他細かい手は説明を省く。

<b>神庭</b>	<p>神庭には内神庭と外神庭があるが、上沼田神楽では主として内神庭を使用する。神庭としては正面の二間四方をとり、四隅に竹及び榊を立て、ここを舞場とする。これが神庭と呼ぶ。</p> <p>向かって右側が楽師の座、左方が神主及び元方の座である。どこでも神の座を東と定め、すべてこれを元として方位を定める。</p> <p>彫り物は、美濃紙2枚に所定の形を（松・竹・梅・鶴・亀・鳥居・松三日月・雲二日・梅二鷺）を掘った物を15枚、七五三縄に張る。</p>
-----------	---

<b>天蓋</b>	<p>天蓋は竹で3尺5寸の正方形の枠を作り、白布を張る場合もあるが、大方は赤・白・緑の天蓋弊を付ける。</p>
-----------	---

## (2) 舞手の衣装

<b>衣装</b>	<p>神楽の衣装は、その神の性格を表すものであり、神楽の意義を理解する上で最も必要な事柄である。以前は白の角袖に袴をつけ、面を着ける者にはその神を表す千早（羽織）を着ける。千早については定説はなく、神の枕詞「千早ふる」の千早と同義で靈感のはやぶる事を意味するものと言われる。現在では衣装は派手になり、凡古来の姿とほど遠いものとなっている。</p>

<b>被り物</b>	<p>被り物は、人物を表す烏帽子と悪を表すガッソー（長い髪毛）を着けるものがある。</p>

<b>神面</b>	<p>神面はその神を表すものであり、神格に従って面が異なっている「面様（おもてさま）」とも表し、全て神殿に飾り神酒が供えられる。これを使用する時には神楽会の長老が拝礼をし、自ずから舞人に掛けてやり、舞が終わればまた神殿に供えて神酒を供える。</p> <p>どの舞も、神面を着けるときは白・赤・青の鉢巻を締める。</p>

<b>鉢巻</b>	<p>神楽で使う鉢巻は、八尺程度の白・赤・青の絹布を前頭から後頭部に廻して締め、その締めたところには白幣をつける。面を着けた場合には面の上から締めるが、これは面の止まりをよくする為である。ガッソーを被る場合も同様で、ひとつには神の性格の相違を表す意味もある。</p>

### (3) 舞手の持ち物等

神楽において持ち物とは、その服装と共に神楽の性格を定める上に重要な事である。これも神と悪に区分され、神の持ち物は榊・幣・扇・鈴・太刀・弓・矢等で、悪の持ち物としては花杖・扇・花火等である。上沼田神楽としては鎮魂の具を示すものとされている。

幣	<p>神楽の幣は幾種類もあり、神楽によって皆切り方が異なっている。上沼田神楽が使う種類は、年祭幣・大幣・小幣・鈴幣・花杖幣、花杖切り・四ツ角切り・天蓋切り・中央幣等である。</p> <p>大幣は1尺5寸の竹串、小幣は1尺3寸の竹串を使い、花杖は2尺7寸・2尺5寸・2尺3寸の長さに切る。紙は白色1メ、赤60枚、青60枚、紺色、金、銀を使用する。時には神庭大幣として3尺程度の白幣で三角に切った頭と麻を用いる。これは信仰を意味し、悪払いや禍い除けとして神楽が済むと村人たちは競ってこれを貰い受ける。注連の幣も同様な信仰を意味する。</p>
扇子	<p>扇子が神楽に用いられる様になったのは能楽が盛行するようになってからと言われている。</p> <p>神楽において扇子とは、風を起こすために使われるものではなく、その神の威厳を示す重要な道具である。扇子の手は、初めは全て閉めて出し、開いてから舞い始めるのが順である。勿論力の展開を意味するもので太さや色が違うが、大体白扇扇子が本意である。</p>
鈴	<p>鈴は招<sup>おがたま</sup>霊の木の実で ったものと言われている。</p>

	<p>また、鈴は荒神の業を現すもので、古事記には「天の香久山の小竹葉を手草に結びて」とあり、天神地祇の舞いの中で神を鎮め奉るという意味からも、上沼田神楽では鈴を振るという事は舞の中心を成す主要な仕草で、神殿への供え物として考えられている。</p>
--	---

<p>杖（花杖）</p>	<p>三尺程度の竹の両端に赤・白・緑の紙を房のように付けた物で、竹はマナ竹で細幅の白紙で斜めに巻き、その上を赤・緑の小幅の紙を斜めに巻く。主として鬼人の持ち物として使用される。</p>
--------------	--

<p>太刀</p>	<p>太刀は主として神と悪の合戦の場に使用される。 伊耶那岐命の「<input type="text"/>」とあるも、太刀は水徳を表すものとして、神楽における太刀は破邪ではあるが、水徳の神として考えられている。</p>
-----------	---

<p>楽器</p>	<p>楽器は大太鼓を主とし、笛と手拍子、締太鼓を用いる。 太鼓は胴の直径 2 尺前後が普通であり、希に 3 尺以上の大型もある。 笛は普通の神楽笛であり、7 つ穴の横笛を使用する。 手拍子は黄銅の一双を両手で合わせ、上下しながら大太鼓に合わせて奏でる。</p>
-----------	--



## 4. 上沼田神楽の演目

- (1) 天神地祇 . . . 9
- (2) 火の神 . . . 9
- (3) 黄泉醜女 . . . 10
- (4) 天の斑駒 . . . 12
- (5) 天の岩戸 . . . 12
- (6) 八俣大蛇 . . . 14
- (7) 大国主の神 . . . 15
- (8) 事代主の神 . . . 16
- (9) 薙刀舞 . . . 16
- (10) 天孫降臨 . . . 17
- (11) 芝鬼人 . . . 17
- (12) 五郎の王子 . . . 18

## (1) 天神地祇

舞人達は一日の煩惱を祓い、身を清め心を静めて神殿に一座した後に神官より清祓いの儀を受ける。

これにより身も心も清められた舞人達が四方を祓うことにより、神庭を清め、その場に神を迎えるための儀式舞いである。



### 縁起

かんど はら きよ はやしこ  
 そもそもこの神庭 祓い清めて早賢うくも  
てんしん ちぎ やおよろず かみ かんじょう たてまつ  
 天神地祇八百万の神を勘定し奉り  
かむ ま ま かむなぐさ まつ  
 神ながらも間に間に神慰め奉り  
みぎいわ ま まつ さま き め もう  
 右祝い舞い奉り様を聞こし召せと申すなり

あまつかみくにつやしろ  
 天津神国津社

いわ まつ とよあしはら くに おさ  
 祝い奉りて豊芦原の国と治まる

さて、この神庭を祓い清めたならば、  
天津神、国津神、八百万の神を迎え入れ、

この舞う姿を

天津神、国津神の社を

奉って豊葦原の国

## (2) 火の神

いざなみのみこと ひのやぎはやおのかみ  
 伊耶那美命は、火之夜藝速男神（火の神）をお産みになつたため、御陰が焼けて病気になる、お亡くなりになつた。

火の神は気性も荒く、各地で禍いを起こされた。妻の死に怒り悲しむ伊耶那岐命は長い剣を抜き、火の神の首をお斬りになった。その剣の先についた血が清らかな巖に走りついて出現した神の名は、いわさくのかみ石折神、ねさくのかみ根折神をはじめとする八柱である。

この時火の神をお斬りになった剣の名を「天の尾羽張」といい、その名を「伊都の尾羽張」ともいう。



### 縁起

○伊耶那岐命 われなんじ 我汝を見てカンサロにより、いま今この  
とつか つるぎ 十拳の剣をもってなんじ汝を斬らん。  
 ↓ (合戦)

○この十拳の剣（拳 10 個程の長さの剣）をもってお前を斬る。

○伊耶那岐命 いざなみのみこと そもそも火の神を斬り給うときに生まれませる神は、石折神、根折神を始め以上八柱なり。この剣を天の尾羽張と申すなり。

○火の神を斬ったときに生まれた神は、岩折神、根折神を始めとする八柱である。この剣を天の尾羽張という。

### (3) 黄泉醜女

伊耶那美命は、火の神を生んだのが原因で亡くなった。妻を失った伊耶那岐命は死んだ妻に逢うために黄泉の国へ行った。

御殿の戸を開けて出迎えた妻に夫伊耶那岐命は言った。「あなたと一緒に創ったこの国はまだ完成していないから、早く帰ってきてくれ。」伊耶那美命は、「私はもう黄泉の国のかまどで煮た物を食べてしまったので帰れません。しかし黄泉の国の神様に掛け合ってみます。その間、決して私を見ないで下さい。」と答えた。

しかし伊耶那美命は御殿の中に入ったまま、中々戻って来ない。伊耶那岐命は、左の角髪に刺していた櫛の歯を一つ折って火をつけ、暗い御殿の中に入った。すると、妻の身体には蛆がうようよしており、身体各部は八柱の雷神が生じていた。伊耶那岐命はこれを見て恐れをなし、逃げ出した。

伊耶那美命は「私に恥をかかせたな。」と云い、黄泉の国の猛女（黄泉醜女）に伊耶那岐命を追いかけさせた。

伊耶那岐命が頭につけていた黒い木の輪を取って投げると葡萄になり、右の角髪に刺していた櫛を投げると筍になり、醜女がこれを食べている間に逃げた。

これを見た伊耶那美命は、更に八柱の雷神に千五百の軍勢を添えて伊耶那岐命の後ろを追わせた。そして現世と黄泉の国の堺である黄泉比良坂まで逃げてきた伊耶那岐命は、そこに生えていた桃の実を三つ採って撃ち、追っ手を撃退した。

ついには伊耶那美命自身自身が追ってきた。伊耶那岐命は、これを止めるために大きな岩石（千引の石）で黄泉比良坂を塞ぎ、夫婦はこの岩を挟んで離別の言葉を交わす。伊耶那美命は「一日にあなたの国の人間を千人殺してやる。」と云い、伊耶那岐命は「それなら私は一日に千五百人の産屋を建ててやる。」と云い、夫婦は離別した。

黄泉の国から戻った伊耶那岐命は、身体に付いた汚れを落とす禊をすることにした。この禊により、数々の神が生まれる。最後に、左目を洗ったときに天照大御神、



右目を洗ったとき月読命、鼻を洗ったときに須佐之男命が誕生する。

## 縁起

○伊耶那岐命 美しき我が妻伊耶那美命。我汝と作りしこの世の国は未だ出来終わらず。かしこければ早く帰り給わんや。

○伊耶那美命 くやしくも遠く来まずして。我黄泉べくいつしされど、美しき我が那岐の命、この国に登り来ませる事。かしこければ帰らんとする。明日にも黄泉神とも合い計らん。しばらく我を見給うなり。

↓ (伊耶那美命が醜い姿となる)

○伊耶那美命 吾に恥見せつ。

↓ (伊耶那美命が引っ込む)

○伊耶那岐命 汝我を助けよ、現世の国まで。今青一草の浮世に落ちて苦しまん時の我を助けよ。しからは汝只今より、大山津見神と名をば申さん。

↓ (醜女登場) (以下の3番、2番は最近言わない)

○3番鬼 逃がしてなるか伊耶那岐命。我こそは賽の河原を切り従えて住む鬼人なるぞ。

○2番鬼 引き返さんか伊耶那岐命。我こそは三途の川を切り従えて住む鬼人なるぞ。

○1番鬼 逃れ給うな伊耶那岐命。我こそは黄泉国の鬼人なり。只今伊耶那美の神の遣いにて、汝これまで追い上げたり。しからは汝の五臓を喰い破り、人の生き血を吸い取って、黄泉の国へといざなわん。

○伊耶那岐命 如何にも汝等黄泉鬼人と見受けた。黄泉の国は現世にあらず、生きるにあらず。今青一草の浮世に落ちて苦しまんとも、必ずや現世の国へと帰り申さん。

↓ (合戦)

○伊耶那美命 美しき伊耶那岐命、ちかし給わば汝国の千頭を、我一口に喰殺さん。

○伊耶那岐命 美しき我が妻伊耶那美命、我一日に千五百の産屋を建てんや。

↓ (合戦)

○伊耶那岐命 醜女醜女、汚き国に至り。今より日向の橘の、小門の阿波岐原にて禊ぎせん。

○愛しい私の妻伊耶那美命よ。私とお前が一緒につくった国はまだ完成していない。だから、どうか帰ってきてくれ。

○残念ながら貴方はすぐ来なかった。私は黄泉の国の食べ物を食べたが、愛しい貴方が来たのは嬉しく恐れ多いこと。何とかして帰りたいと思うので、黄泉の国の支配神と談判する。どうか私の姿を見ないでくれ。

○私に恥をかかせたな。

○私を現世の国まで案内しろ。浮世で苦しんでいる私を助けよ。ならばお前をこれより、大山津見神と名付けよう。

○逃がさんぞ伊耶那岐命。我こそは賽の河原を切り従えて住む鬼人である。

○引き返せ伊耶那岐命。我こそは三途の川を切り従えて住む鬼人である。

○逃げられると思うな伊耶那岐命。我こそは黄泉の国の鬼人である。伊耶那美命の遣いによりお前を追ってきた。お前の五臓を喰い、生き血を吸い取って、黄泉の国へと引き込んでやる。

○確かにお前達は黄泉の国の鬼人であろう。黄泉の国は現世でなく、生きるところでもない。今この黄泉の国に落ちて苦しんでも、必ず現世の国へと帰り着く。

○愛しい伊耶那岐命。別れるなら貴方の国の人間を一日千人絞め殺してやる。

○愛しい我が妻伊耶那美命。それなら私は一日に千五百人の子を生ませよう。

○汚れた国に行ってしまった。日向の橘の小門の阿波岐原で禊ぎをしよう。

## (4) 天の斑駒

伊耶那岐命から海原の統治を任された須佐之男命だが、その任を行わず、亡き悲しんでいるばかりだった。訳を尋ねると、「母のいる根の国に行きたくて泣いている」とお答えになった。これに怒った伊耶那岐命は須佐之男命を追放する。

次に、天照大御神に頼もうと高天原に上ると、天照大御神は弟が国を奪いにきたと考える。この疑いを晴らすべく誓約を行うと、天照大御神からは男神が、須佐之男命からは女神が生まれる。

心の清さ明るさ故に女神が生まれたと勝ちを主張する須佐之男命は凶に乗って田の畦を壊し、大嘗を召し上がる御殿に糞をちらす。天照大御神は広い心で行動を直そうとしたが悪行はやまず、ますますひどくなっていった。

ある日、天照大御神達が神聖なる織屋で衣を織っていた時、屋根から皮をはいだ斑の馬を落とし入れる。

## (5) 天の岩戸

弟・須佐之男命の乱暴に恐れを抱いた天照大御神は、天の岩戸に入り、戸を閉め切り籠もってしまわれた。すると、高天原は暗くなり、芦原中国もすべて真っ暗になった。その結果、永久の夜が続いているようで、ありとあらゆる災いが起こった。

これに困った神々は、話し合いの結果、天の岩戸の前で乱痴気騒ぎをする。自分が隠れ、世界が暗くなったのになぜ楽しそうに騒ぐのかを不思議に思った天照大御神は天の岩戸を少し開き、様子をうかがった。

さらに少し踏み出したところを天手力男命が引き出し、世界に光が戻ったという。

この騒動の罰として、須佐之男命は手足の爪を抜かれ、体罰を受け、高天原から追放された。

○思金命 おもいかねのみこと たかみむすびのかみ おんこ 高御産巢日神の御子にして、  
思金命。建速須佐之男命怒り給う猛け給う、荒  
び給うにより天照大御神は御身を天の岩戸に閉じ  
隠らせ給う。高天原と豊芦原の中ツ国皆暗く、  
やおよろずの神たち安の河原に集り行く事を計り給  
う。

○思金命 あまのこやねのみこと ふとだまのみこと なんじ あまのかぐやま 天兒屋命、布刀玉命。汝らは天香久山の  
天の榊を根こそぎ小掘して、上ツ枝には玉を、中  
ツ枝には八尺鏡をかけ、下ツ枝には青ニギテ、白  
ニギテを取りつけて、祝詞言を申すべし。

- 天兒屋命、布刀玉命 謹んでお受け申す。
- 思金命 たまおやのみこと 玉祖命。汝は天の河原の石を取り付けて天の御玉みたまを作り給うべし。
- 玉祖命 謹んでお受け申す。
- 思金命 いしこりどめのみこと 伊斯許理度売命。汝は八尺鏡を作り給うべし。
- 伊斯許理度売命 謹んでお受け申す。
- 思金命 あまのうづめのみこと 天宇受売命。汝は天の榊さかきをつま先で串にこして、まさきカズラとし、香久山笹葉を手草にゆいつけて舞いまつるべし。
- 天宇受売命 謹んでお受け申す。
- 思金命 手力男命。汝は天の岩屋の陰に隠れ立ち給うべし。
- 手力男命 謹んでお受け申す。
- そもそも早畏くも、天照大神宮の岩屋にとじ込めらせ給う。建早須佐之男命怒り給う猛け給うにより、御身を岩隠し給うければ、八百万の神達安の河原の集い行く事を計り給う。天兒屋命、天布刀玉命は天の榊いを根こそぎ小掘りして、上ツ枝には玉を掛け、中ツ枝には八尺鏡を掛け、下ツ枝には青ニギテ、白ニギテを取り付けて、祝詞言を申させ給う。
- 天宇受売命は天の榊いをタスキに掛けマサキカズラとし、香久山笹葉を手草に結いつけて舞い掛け給う。我岩隠れにより高天原暗く豊葦原の中つ国皆暗く大神、抜神達楽しみに賑おうなり。
- 天宇受売命 大神、抜神、マスユエは笑いよるなり。

鏡や玉を作らせ、雄鹿の肩の骨をあぶって占いをし、神の御心をうかがわせた後、天の香久山の榊を根こそぎ掘って、これに玉と鏡木綿と麻をたらし、これを天兒屋命、天布刀玉命が持ち、天兒屋命が祝詞を奏上し、天宇受売命は裸踊りを踊った。

これを見て、高天原が鳴動するばかりに神々は笑った。不思議に思った天照大神は岩戸を細目にあけた。天宇受売命は貴方より貴い神がおられるので皆笑っています、と答えた。そしてあの鏡を天照に見せた。

天照が戸口から出掛けると、手力男命は天照の手を引いて外に引き出した。  
高天原にも中ツ国にも再び光明が蘇ったのである。

## (6) 八俣大蛇

高天原から追放された須佐之男命は、老いた夫婦が一人娘を中において泣いているのを見つける。

須佐之男命がその訳を尋ねると、「私たちには8人の娘がいたが、毎年「八俣大蛇」が出て娘を喰い、最後に残ったこの櫛名田比売姫もさらわれようとしている」という。

須佐之男命は、櫛名田比売を奉ることを条件に、八俣大蛇退治を引き受ける。

そこで、酒を満たした桶を用意し、大蛇に飲ませ、酔いつぶれたところを斬り倒す。最後の一匹の尾を斬ったときに剣の刃が欠けていた。不思議に思って尾を裂いてみると中に1本の大刀があった。



須佐之男命は、これはただの剣ではないと考え、天照皇太神に献上した。これが天之叢雲剣（あめのむらくものつるぎ）、後に草薙剣（くさなぎのつるぎ）と呼ばれる、日本三種の神器の一つである。

### 縁起

○須佐之男命 いましらは如何なるくにもの国の者なるや。

○足名稚 われら我等はもと大山津見神の子にして、我が名は足名稚、妻の名は手名稚、娘の名を櫛名田比売と申す者なり。

○須佐之男命 いましらの泣く故は如何なるや。

○足名稚 われら我等にはもと八稚女ありしが、毎年八俣大蛇出で来たりて娘を皆取り喰らい、残る櫛名田比売を今に取りさらわんとする故泣くなり。

○お前達はどのような由来の者だ。

○私達は、大山津見神の子であり、私の名を足名稚、妻の名を手名稚、娘の名を櫛名田比売と申します。

○お前達はどのように泣いているのだ。

○私達には以前8人の娘がいたが、毎年八俣大蛇に喰われ、最後の櫛名田比売も今さらわれようとするため泣いている。

<p>○須佐之男命 其の大蛇の形は如何なるや。</p> <p>○足名椎 其の大蛇の形は、頭が八つ尾が八つ、八つが峯八つの谷にまたがり、背に苔生い杉生いて、血に爛れているなり。</p> <p>○須佐之男命 その娘が、汝等の娘なら俺に奉らんや。出で来る大蛇は退治せん。</p> <p>○足名椎 恐けれども大御神の名を知らずして。</p> <p>○須佐之男命 我が名は、天照大御神の弟、須佐之男命。今高天原より天降りたり。</p> <p>○足名椎 娘はおいおい奉る。出で来る大蛇を退治給うなり。</p> <p>○須佐之男命 汝等は、八塩の酒を醸み、八つの門を設け、八俣大蛇出で来るを待たれよ。</p> <p>○足名椎 かしこまって候。</p>	<p>○その大蛇はどのような形なのか。</p> <p>○その大蛇の形は、頭が八つ尾が八つ、八つの峯・谷におよび、背には苔、杉が生え、腹はいつも血で爛れている。</p> <p>○その娘を私に出来ないか。それならば大蛇を退治してやろう。</p> <p>○恐れ多いが、貴方の名前を伺ってない。</p> <p>○私の名は天照大御神の弟、須佐之男命。今高天原から天降ってきたところだ。</p> <p>○娘は差し上げましょう。現れる大蛇を退治していただきたい。</p> <p>○お前達は何度も醸造した強い酒を作り、八つの門を設け大蛇の現れるのを待て。</p> <p>○わかり申した。</p>
--	---

## (7) 大国主の神

高天原の天照大御神は、葦原の中つ国を我が子孫の支配する国であるとして子孫を天降らせようとしたが、そこには荒ずる神たちが騒いでいたので、先ず使者を遣わせた。その最初の使者が天菩比神であったが、この神は大国主に媚び付き3年たっても報告されなかった。次に天若日子を遣わしたが、これも大国主の娘、下照比売と結婚して8年たっても報告されなかった。

そこで、最後に建御雷神（常陸の鹿島神宮）と天鳥船神（奈良の春日大社）の2柱を遣わされた。建御雷神は、出雲の稲佐の浜に天降りて波の上に剣を逆立てその峰にあぐらをかいて座り、大国主の命に対し葦原の中津国の支配権を天照大御神の御子に譲るよう要求した。

大国主の命は、子である事代主の命に支配権を譲っていると返答し、二神を連れて館に引き上げていかれた。



<p><b>縁起</b></p> <p>○二神 そもそも我ら二神は、天照神をもって答いに遣せり。汝支配豊葦原の中つ国は、これ我が下配召す国と思えり、汝が心は如何にと。</p> <p>○大国主の命 我今は世を去り、我が子、八重事代主の神とは申すなり。今、美保岬に行き釣り遊びを</p>	<p>○私達は天照大御神の遣いである。お前の支配する豊葦原中津国は本来私達が支配すべき国と思うが、どう思われる。</p> <p>○私はすでに退き、私の子、事代主の命に支配を譲っている。今は美保岬に釣りをしに</p>
---	---



<p>して未だ<sup>いま</sup>帰<sup>かえ</sup>り申<sup>もう</sup>さず。</p>	<p>行き、まだ帰ってこないのだ。</p>
--	-----------------------

## (8) 事代主の神

大国主の御子に八重事代主の命<sup>やえことしろぬしのみこと</sup>があった。事代主の命は、父大国主より受け継いで出雲の国を支配していた。山や海の漁好きで、美保の岬に出かけては魚を獲っていた。

国譲りの使者、建御雷神たちは大国主の命と別れて美保の岬に出かけ、魚を獲っていた事代主の所に出かけた。そして事代主の命を呼んで国譲りの言葉を申された。

事代主の命は、「この国はもともと天照大御神の支配される国であり、葦原の中津国は天照大御神の御子に奉りましょう」と返答し、自分の乗っていた船を傾け、海中に青柴垣を造り、その中に隠れ海中に沈まれたのである。



<p><b>縁起</b></p> <p>○事代主の命 我が名<sup>おのな</sup>、八重事代主の神<sup>やえことしろぬしのかみ</sup>とは申すなり。</p> <p>↓ (舞い)</p> <p>○事代主の命 ああ、出雲<sup>いずも</sup>の国美保岬<sup>くにみほのみさき</sup>に行き、釣<sup>つ</sup>りの遊<sup>あそ</sup>びを砂<sup>すな</sup>とりて、心<sup>こころ</sup>慰<sup>なぐさ</sup>め遊<sup>あそ</sup>びよるなり。</p> <p>↓ (舞い)</p> <p>○二神 といましみことは、天津神<sup>あまつかみ</sup>詔<sup>みことり</sup>のまにまに、この国を奉らんや。</p> <p>○事代主の命 父<sup>ちち</sup>大国<sup>おおくに</sup>かしこし、この国<sup>くに</sup>は天津神<sup>あまつかみ</sup>詔<sup>みことり</sup>のまにまに、我<sup>われ</sup>奉<sup>たてまつ</sup>り給<sup>たま</sup>うなり。</p>	<p>○私の名は、事代主の命と言うものである。</p> <p>○出雲国の美保岬に行き、釣りをしながらゆっくり休んでいるところだ。</p> <p>○天津神の詔に従い、この国を譲ってはもらえないか。</p> <p>○父である大国主の命にならい、この国は天津神の詔に従い、お譲りします。</p>
--	--

## (9) 薙刀舞<sup>なぎなたのまい</sup>

この舞いは、天孫降臨の道案内を務める前の猿田彦<sup>さるたひこ</sup>の舞である。

天孫の降臨に当たって、天と地の分かれ道で荒神の神共が禍いを起こし荒らしまわっていると聞き、猿田彦はその平定に乗り出した。

身丈以上もある薙刀を自由自在に操り、その武勇に荒ぶる神共は恐れをなして逃げていった。そして棚引く雲を払い、天神の御子の降臨をひたすらに待っていたと云われている。



## (10) 天孫降臨

邇邇芸命が天降りなさろうとする時に天から降る道にあって、上は高天原を照らし、下は葦原中国を照らしている神がいた。

天照大御神と高木神の仰せによって、天宇受売命に何者かを尋ねさすと、「名を猿田彦と言い、天孫降臨と聞き参った」と答えた。

一行は、この猿田彦に先導を命じ、筑紫の日向の高千穂に天降りになった。

## (11) 芝鬼人

邇邇芸命の子、兄の火照命と弟の火遠理命の争いの神楽である。

火照命は気性も荒く、鬼人荒平とも呼ばれ、金銀財宝を山積みしていた。弟の火遠理命は人情も厚く、人徳高い人柄であった。

ある時、火照命の財宝の一部が盗み取られ、火照命は西天竺から南天竺まで探しまわり尋ね歩いたが、我が財宝に似た財宝はなく、荒れ果てていた。

この狂態を火遠理命にさとされる舞いである。

### 縁起

○火遠理命 春霞みものさよも、伊勢ばやとわぬべし。山のつわるも高く名乗らん。

○火照命（荒平）山高き峰きびしきこの城に、あほうらの者住みてたれわの者住むべきや法の主。

○火遠理命 夏山焼け、霧の梢も尊くして、空には蟬の声ぞ勇る。

○火照命（荒平）山里はよこそめはれて、この頃夏吹く風にもとせされや、法の主。

○火遠理命 秋草も実ぶばかりになりにはけり、いざキリギリス衣返さん。

○火照命（荒平）木の芽して木の葉散らすも燦々と、ちんはちんやの駒に乗り初めて金の鎖で繋ぎおかばや法の主。

○火遠理命 冬来れば、谷川つけし氷水、時雨にしげし山巡り合う。

○火照命（荒平）さて荒平は天下太平、国家安全を舞い奉り、まささき場を相争う事道理なり。

あざの山の麓に置いて、我が山の芝を盗み取られ尋ね廻るところ、東天竺、南天竺、西天竺、北

天竺、龍泉きばくけいたい、おおらいまで尋ね廻れども我が山の芝に似たる芝はなく、荒平は元の住処に立ち帰り、聞けば丑寅の住処にもち行き一首の歌を書くばかりにあるまじき事今日と聞かせん。あおや、はやしきを述べて御座とふみせん。

さて荒平の住処所は高さ10丈、厚さ5尺に積み上げられたり円波が高地岩、我が城に導いて4万6千の鬼共を集め、鬼の大將我ぞかし、我はかような鬼の姿であるぞかし。

○火遠理命 汝はかような鬼の姿であるぞかし。荒平の杖の持ち方法を斯様に申せやの。

○火照命（荒平） 荒平の杖の持ち方法とは、五方六方人のたまずをとり、一つは縁行袋、二つに風懷笠、三つに小三木、四つに浮閑人万象、五つは自判杖。

一つに縁行袋とは、黄金の袋の事なり。

二つに風懷笠とは、隠れ哀隠れ笠の事なり。

三つに小三木とは、打手の小槌の事なり。

四つに浮閑人万象とは、東西南北浮き沈む事なり。

五つに自判杖とは、この杖の事なり。この杖に五つの法こもらせ給う。これ用いて追いたる人を招けば、七難を払い、七福をいけす。長寿御せいを込めた杖するぞや。これ蔵の下積みにせよ。

## （12）五郎の王子

日本書紀による神代七代の最初の神、<sup>こくしやうりゆうおう</sup>国常立王の4人の王子の所へ、四神達の弟、五郎の王子の使いと名乗る者が現れ、4人の王子達が、春夏秋冬の四季、東西南北の四方を占領し、年中360日を所領として第五王子には閏月と言えども所領とすることができないので所領を分けて欲しいと交渉に来るが、四神たちは、第五の王子が居ることなど知らない相手にしない。そこで五郎の王子を連れて来るが四神達は、五倫の道、五行の運行、四節の経過、四苦の存在など長々と論じ、天下はすべて四神の王土であると強調する。五郎の王子は怒り、それぞれ五神とも軍勢を率いて合戦となる。そこへ天の神の使いの老人「文點」が登場し、五神達に神勅を下し、領地を分割して、仲裁をし、国土が豊かになる。

縁起

## 一幕

○四人 そもそも四方に吊りたる天蓋は、我等四人のものにて候。空きたる所は少しもなく、所望の業はあるまじき候。

↓ (五郎現れる)

○五郎 そもそも東方兄太郎の王子や、お聞きなされ候。

○東方兄太郎 さも何事にて候。

○五郎 それ父藩五代玉五男の王子を竜王にも四節の所望は、五つに分けてご分配なされ候。

○東方兄太郎 四節の所望は、兄弟四人して知業を任り候。空きたる所は少しもなく、所望の業はあるまじき候。

○五郎 あれや、情けなき事仰せにてものかや候。

○東方兄太郎 南方二郎の王子にお聞きなされ候。

○五郎 南方二郎の王子や、お聞きなされ候。

○南方二郎 さも何事にて候。

○五郎 それ父藩五代玉五男の王子を竜王にも四節の所望は、五つに分けてご分配なされ候。

○南方二郎 四節の所望は、兄弟四人して知業を任り候。空きたる所は少しもなく、所望の業はござなく候。

○五郎 あれや、情けなき事仰せにてものかや候。

○南方二郎 西方三郎の王子にお聞きなされ候。

○五郎 西方三郎の王子や、お聞きなされ候。

○西方三郎 さも何事にて候。

○五郎 それ父藩五代玉五男の王子を竜王にも四節の所望は、五つに分けてご分配なされ候。

○西方三郎 四節の所望は、兄弟四人して知業を任り候。空きたる所は少しもなく、所望の業はござなく候。

○五郎 あれや、情けなき事仰せにてものかや候。

○西方三郎 北方四郎の王子にお聞きなされ候。

○五郎 北方四郎の王子や、お聞きなされ候。

○北方四郎 さも何事にて候。

○五郎 それ父藩五代玉五男の王子を竜王にも四節の所望は、五つに分けてご分配なされ候。

○西方三郎 四節の所望は、兄弟四人して知業を任り候。空きたる所は少しもなく、所望の業はござなく候。

○五郎 あれや、情けなき事仰せにてものかや候。

○北方四郎 東方兄太郎の王子にお聞きなされ候。

○東方兄太郎 さも何事にて候。

○五郎 それ父藩五代玉五男の王子を竜王にも四節の所望は、五つに分けてご分配なされ候。

候。

○東方兄太郎 四節の所望は、兄弟四人して知業を任り候。空きたる所は少しもなく、所望の業はござなく候。

○五郎 あれ情けなき事仰せられるものかや。

東方兄太郎の王子に聞けば、南方二郎の王子に問えとの御答えあり。

南方二郎の王子に聞けば、西方三郎の王子に問えとの御答えあり。

西方三郎の王子に聞けば、北方四郎の王子に問えとの御答えあり。

北方四郎の王子に聞けば、東方兄太郎の王子に問えとの御答えあり。あれに問え、これに問え、あれにはね、これにはね、あれに名付け、これに名付けして、遂に一度のご承認も賜らず、それがしは幼き者として、侮りし侮られし事恨めしや。年増さって成長し、背高く成って弓矢の負け勝ちをもって四節の所望は取るにおいて王子達は、弓・矢・太刀の覚悟なされ候。早く急がれなされ候。

## 二幕

○五郎 月上段隠るれば、扇を揚げてこれにたたうれ。清体は衣にて岩尾の隠れり白運は帯にて、須弥の越を巡り、龍神は一滴の水をもって四海の海を作り判時一つは日輪にて三千大千世界を照らし賜うとかや、一時忠等の車は無理無段の内に入り、一丁甫代の春の駒は、兵造大廷の庭にいなき、日中原門の鶯は毛々須々城の谷にさえざる。如何にや大廷京知の帝兄太郎の王子やお聞きなされ候。

是れ父萬五代玉、五男の王子龍王は、年七才の春の頃に、小弓に箭を取添えて青帝青龍王の一つの木戸に立ち二の木戸に参り弟七度までは所望の由しを申し候え共遂に一度の御正卵も賜わず欲し苦姿は主仙をもって目されるとの仙事請賜り是れ通天に吞昇り兄の宮へあずけ入れ我も王子なれども七月半になれば胎内にて耳を聞き男子なれば取らせよと弓矢百ふり太刀百ふり母院の宮にあずけ置かれし事確かに覚えて候、男子女子疑いなし女子ならば取らせよと康の鐘に、王子の手箱十二一衣マキの手箱母院由来の宮にあずけ置かれし事確かに覚えて候。拾万余騎の強者は小神子を語良い五萬五千の軍兵は勇みて一時の村時雨となりて降り下るあれあれ御覧に候えども希くば四節所望五つに分け五分配なされ候。

○東方兄太郎 四節に四節と申す節は申し候らえども、四節に五節と申す節は申し候らわず、空きたる所は少しもなく所望の業はあるまじく候。

○五郎 あれや情けなき事仰せ候、これ主君に向いて弓を引く事、拾逆代の罪とかや、親に向いて弓を引く事、八百代の罪とかや、兄に向いて弓を引く事、五百代の罪とかや、申し候らえども天が下の弓矢の習いによって、天荒神も地荒神も三寶荒神も胞奈荒神までもゆるされ賜う、弓は弦を堺に、太刀は目貫を堺にして一合戦参らせ候。

↓ 合戦

○五郎 弓矢で勝負つかず太刀の合戦もう一合戦参らせ候。

↓ 合戦

↓ 文點登場

○文點 天清淨、地清淨、祓い申す、清め申す。納り賜伊、鎮り多満恵、天も鎮まり、地

も鎮まり、四方鎮まり、中鎮まり給いて、御聞きなされ候。

○五郎 只今御前に立賜翁を眺め奉れば天王には、白髪を頂き、顔には四海の浪打多美、腰にはあづさの弓を張り、前には八志の下垂、御手には七尺五寸の高弊を捧げてこの所に現賜いて、天清浄、地清浄、祓い申す、清め申す。と、文を唱え給うは如何行きする人が申せやのを、我らがの合戦をおさめん程なれば、劍の切刃に掛られ賜う。

○文點 阿々礼情けなきことを仰せにて候。東照大神の御子に福照大神御子に文點博士王子たちは、己より三代あとの訴の臣にて候。

○五郎 謹んで文點のきり詞を拝し、王子たちは恐れ入り恐れ申す。三度礼拝申す礼拝申す。

↓ 礼拝して座る

○文點 只今、汝等の弓戦の合戦は如何なる由来にて候。

○五郎 我等弓戦の合戦は、是父藩五王、五男王子龍王は年七才春の頃、小弓に小箭を取り添えて青帝青龍王一の木戸に立ち、二の木戸に参り、弟七度迄は所望の由を申し候えども、遂に一度の御承印も賜らず、あまねくは四節の内の所望は五つに分けて五分配なされ候。

↓ (文點「承って候」と兄太郎の前へ進む)

○文點 兄太郎王子やお聞きなされ候。

○東方兄太郎 何事にて候。

○文點 只今、第五郎の王子の仰せには、此父藩五代王五男王治王龍王は年七才春の頃、小弓に小箭をとりそえて青帝青龍王一の木戸に立ち、二の木戸に参り弟七度まで所望の由を申し候えども、遂に一度の御承印も賜らずあまねくは自ら参じて候。四季の所望は五つに分けて御分配なされ候。

○東方兄太郎 あらや情けなき事を仰せにて候。四季に四節を申す節は申し候えども、四季に五節と申す節は申し使わぬ所望の儀やめるまじき候。此の通を文點王は第五郎の王子に仰うれ候。

○文點 申し候。第五郎王子やお聞きなされ候。

○五郎 拝何事にて候。

○文點 只今兄太郎の王治の仰せには、四季に四節と申す節は申し候えども、四季に五節と申す節は申し候わぬ所望の儀あるまじき候。

○五郎 阿々礼情けなきことを仰せにて候。ここに一つの譬も候、御帝五龍王とたつるも五つなり。地水火風空とたつるも五つなり。水火木金土とたつるも五つなり。刃劔氷帝王とたつるも五つなり。願わくば四節所望は五つに分けて御分配なされ候。此の通りを兄太郎の王子に仰せられ候。

○文點 第五郎の王子の仰せには、あらや情けなき事仰せにて候。ここに一つの譬も候。御帝五龍王とたつるも五つなり。地水火風空とたつるも五つなり。水火木金土とたつるも五つなり。刃劔氷帝王とたつるも五つなり。願わくば四節所望は五つに分けて御分配せよとの仰せにて候。

○東方兄太郎 第五郎の王子には色々な例え事仰せられ候。ここに一つの譬も候。谷拾丈

の木は峯一丈木に影をなさず峯一丈木は谷拾丈の影をなすとの例えも候。

- 五郎 兄従わんとは如何に、此の通り五郎王子仰られ候。
- 文點 第五郎の王子、東方兄太郎の王子、南方次郎の王子、西方三郎の王子、北方四郎の王子、皆この文點にお任せ候。
- 一国五人 一同御任せ候。
- 文點 東方兄太郎の王子御聞き候。
- 東方兄太郎 何事とて候。
- 文點 是より東方には青き国あり。青き国には青き旗を立て、春三月九拾日が内拾八日取り残し、置き残る七拾弐日を楽し給う。是は青帝青龍王の神となり給い、我が国に帰りて出世して行け。
- 東方兄太郎 御乗受け賜って候。
- 文點 南方次郎の王子御聞き候。
- 南方次郎 さも何事にて候。
- 文點 是より南方には赤き国あり。赤き国には赤き旗を立て、夏三月九拾日が内拾八日取り残し、置き残る七拾弐日を楽し給う。是は赤帝赤龍王の神となり給い、我が国に帰りて出世して行け。
- 南方次郎 御乗受け賜って候。
- 文點 西方三郎の王子御聞き候。
- 西方三郎 さも何事にて候。
- 文點 是より西方には白き国あり。白き国には白き旗を立て、秋三月九拾日が内拾八日取り残し、置き残る七拾弐日を楽し給う。是は白帝白龍王の神となり給い、我が国に帰りて出世して行け。
- 西方三郎 御乗受け賜って候。
- 文點 北方四郎の王子御聞き候。
- 北方四郎 さも何事にて候。
- 文點 是より北方には黒き国あり。黒き国には黒き旗を立て、冬三月九拾日が内拾八日取り残し、置き残る七拾弐日を楽し給う。是は黒帝黒龍王の神となり給い、我が国に帰りて出世して行け。
- 北方四郎 御乗受け賜って候。
- 文點 五郎の王子御聞きなされ候。
- 五郎 何事にて候。
- 文點 是より中央には黄なる国あり。黄なる国には黄なる旗を立て春三月拾八日、夏三月拾八日、秋三月拾八日、冬三月拾八日、是を合わせて七拾弐日を楽し給う。是は黄帝黄龍王の神となり給いて我が国に帰りて出世して行け。
- 五郎 それが似わちりぢり端ばしを給って候。
- 文點 あれや情けなき事仰せにて候。
- 五郎 三年に一度のらるうも候。
- 文點 東方青帝青龍王の神に奉り候。

- 五郎 二期の彼岸も候。
- 文點 南方赤帝赤龍王の神に奉り候。
- 五郎 月六日の土公日も候。
- 文點 西方白帝白龍王の神に奉り候。
- 五郎 日々廻るかく明神の神も候。
- 文點 北方黒帝黒龍王の神に奉り候。
- 五郎 されば、文點王に御引出物をいたす。四季の内の土用には三日当たりの間がある。  
その上に社を立て堂々と献願いたせやのう。是が文點王の御引出物。
- 文點 御乗うけたまわりて候。兄弟の御仲のなをりし事天下大平。五穀豊穰の舞いを舞い立て我が国に帰りて出世をして行け。
- 五郎 第六郎の配分を任せり候。
- 文點 第六郎の王子には是より上の河上の平晶原の笹畑一枚あり。こんにやく作って奉らせ候。